The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	学業・スポーツ領域における帰属様式 : 達成の重要性と努力観を考慮して
Author(s)	上野, 淳子
Citation	大阪大学教育学年報. 2003, 8, p. 191-200
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5355
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学教育学年報 第8号（2003年）
Annals of Educational Studies Vol .8

学業・スポーツ領域における帰属様式
—達成の重要性と努力観を考慮して—

上 野 淳 子

【要旨】

本稿の目的は、達成の重要性と努力観を考慮して学業・スポーツ領域の帰属様式を検討することである。大学生を対象に、自由記述で達成経験を得るという方法を用いた。研究1では、失敗条件における能力・内的努力・外的努力への帰属を検討した。研究2では、重要性が非常に高い目標の成功・失敗条件における能力・努力帰属を検討した。結果、達成の重要性が高いほど失敗を能力に帰属しない傾向が学業・スポーツ領域ともに示された。また、学業の成功・失敗とスポーツの成功は努力に多く帰属されていた。スポーツの失敗は能力に帰属される傾向があるが、重要性が高まるほど努力に帰属される傾向が示された。努力観を考慮した分析では、「努力しても結果を出すことができない」「努力は犠牲を伴う」「努力は嫌い」というネガティブな努力観を持っている者が、失敗を外的努力不足に帰属しやすく、成功の能力帰属が低かった。様々な努力観があり、それによって努力帰属の意味が異なる可能性が示唆された。

1．問題と目的

目標を持ち、それに向かって努力する。学校教育などであるべき姿として賞賛される行為である。しかしながら、不幸なことに、それは常に成功に終わるとは限らない。だが、逆説的ではあるが、成功が必ずしもいい影響のみをもたらすわけではなく、失敗がいつも悪い結果を招くわけでもない（尾崎・上野, 2001）。重要なのは、出来事をどう解釈するかという過程である。目標達成の成功や失敗がどのような意味を持つ体験となるかについては、原因帰属が大きな鍵として考えられており、帰属論的（attributional）理論（Antaki & Brewin, 1982）は帰属によって感情や行動がどう影響されるかに関して有力な知見を提供している。例えば、絶望感理論（Abramson, 1988）は、ネガティブな出来事の経験が絶望感を生むとするが、それは安定的（stable）で全般的（global）な原因（能力の無さなど）への帰属を媒介として起こるものだとする。Weinerの達成動機づけ理論（Weiner, 1979; Weiner, Frieze, Kukla, Reed, Rest & Rosenbaum, 1971）では、例えば成功しても努力に帰属した場合には次回の達成行動につながらないが、能力に帰属すれば誇りの感情と次への期待につながるとされ、反対に、失敗の能力不足への帰属は大きな負の影響を与えるが、失敗の運帰属はダメージを緩和するとされる。このような見解に基づき、達成と帰属に関して多数の研究が蓄積されてきた。本稿では、学校教育で達成が強調されることが特に多く、努力の対象として最も一般的な（上野, 2001）、学業・スポーツ領域の帰属様式に注目したい。日本における実証研究では、現実生活での学業結果は努力に最も帰属され、能力帰属の程度は成功・失敗間で変わらない傾向が示されている（北山・高木・松本, 1995）。スポーツ領域の目標を扱った研究は学業領域に比較すると随分少ないが、成功は努力へ、失敗は能力に多く帰属されるという結果が主である（伊藤, 1980; 伊藤・豊田・杉原, 1985）。成功は能力帰属することが最も適応的とされるが、わが国では両領域ともその傾向は見られず、またスポーツ領域では失敗を最も不適応的な無能力に帰するという点で、全体に自己卑下的帰属がとられていることになる。しかし、そう結論づける前にいくつかの問題点が指摘できる。

まず、そもそも本当に達成が志向されていたか領域かどうかという点である。従来の研究のほとんどがそれを考慮せず、調査者が一方的に与えた領域について帰属などの評定を求めるという方法をとってきた。しかし、Weiner et al.（1971）が指摘するように達成動機の高低によって帰属様式が異なり、日本での実証研究にも達成動機が帰属様式や感情・次への期待に影響することを示すものがある（相川・三島・松本, 1985）。達成行動としての実際の努力の程度と努力帰属量が関連するのも論理的必然である。したがっ

て、真に達成に動機づけられていた目標か考慮する必要がある。また、その上で目標達成の重要性を考慮しなければならない。重要な領域での失敗も能力帰属するなら自己卑下的であると言えるが、重要性が低い場合はさほどのダメージも受けないため、簡単に能力不足に帰するのかもしれない。大学生の心理学試験の帰属を扱った古城（1980）では、匿名が保証されていれば成功条件の方が失敗時より能力への帰属が高く、謙遜を重んじる社会規範がその表出を阻んでいるが、実際には自己高揚的帰属が行われていることが窺われる結果となっている。このような帰属様式は、匿名が保証された場合だけではなく、どうしても達成したかった重要性が非常に高い領域を扱った場合にも見られるのではないか。

次に、重要な帰属因である「努力」をめぐってもいくつもの問題がある。理論上の次元では「内的」「不安定」(Weiner et al., 1971)、「統制可能」(Weiner, 1979) などに布置される努力であるが、人格変数として捉えると安定的要因と見なされ（Weiner, 1979; Weiner, 1983)、その位置づけや次元設定自体にも問題が多い（奈須, 1988)。また、失敗を努力不足に帰属することは、失敗を内的要因とする点で一時的には負の感情を起こさせるものの、結果的には自己効力などを高め達成行動を促進させると考えられている(Bandura, 1977; Weiner, 1979; Weiner et al., 1971)。しかし、欧米とは異なり日本においては努力帰属が他帰属より格段に多く（北山・高木・松本, 1995)、さらに達成の意欲に結び付かない場合が多い（桜井, 1989)。これらに関して様々な議論がなされているものの、そこでは個々人にとって努力とは何か、という根本的視点が抜け落ちているように感じられる。特に、日本人論などでは、努力が日本人にとって思想の根幹をなしており、その独自で複雑な機能は学校教育でも重要な役割を果たしていることが指摘されており（天沼, 1987; 土居, 1971; 苅谷, 1995; 中谷, 1991)、従来の研究では考慮されていなかった努力の形態や機能も実際に存在することから（上野, 2001)、一口に「努力のせい」と言っても、個人によってその努力帰属の意味するところが全く異なっており、それ故に理論と一致した結果とならないことが考えられる。したがって、これまでの理論に囚われないより自由な視点から、個々人が努力帰属に込めた意味を考慮する必要がある[1)]。

以上の問題点をふまえ、大学生を対象とする2つの調査研究を行った。達成を志向していた自我関与の高い目標を得るのに有効な自由記述を用い（平川（上野）・尾崎, 2000)、達成の重要性に留意しつつ、得られた目標の成功や失敗の帰属様式を検討した。また、努力観を考慮することによって、努力帰属の意味と帰属様式の違いを捉えようと試みた。

2．研究1

(1) 目的

研究1では、失敗時の努力帰属の機能が問題となっているので（桜井, 1989)、失敗に条件を絞り、領域を大枠に指定した上で自由記述を求めることで学業・スポーツ領域の達成目標を得る。そして、重要であれば能力不足に帰属しない傾向が見られるか、また最も多い帰属因は何か検討する。さらに、努力観を考慮しつつ失敗の帰属様式を検討する。

(2) 方法

被調査者と手続き　大阪府下の大学に所属する大学生220名（男性107名、女性113名；平均年齢20.43歳)。1998年7月に質問紙を手渡しして回答を求めた。

調査内容　①学業領域の重要度と帰属の評定：「あなたは、今までに学業で失敗したことがありますか。あるいは苦手な科目がありますか。…いつのことでもどんなことでもかまいません」と学業領域の目標を記述させ、それで成功することの重要度評定を求めた（4件法)。帰属の評定は100点満点で数直線上に○をつけるという方法で行った。帰属因は、「もともと能力がなかったから（能力帰属)」「努力しなかったから（内的努力帰属)」「何かのせいで努力できなかったから（外的努力帰属)」である。「何かのせいで…」というのは、努力帰属ではあるが、Weiner理論の設定次元からはずれる意味あいを含んだものであり、このような努力の存在はこれまでの研究結果で示唆されている（上野, 2001）ため、探索的に導入した帰属

因である。なお、必ずしも合理的推論を行っているとは限らないので、合計で100点を越えても構わないと付記した。②スポーツ領域の重要度と帰属の評定：スポーツ領域に関しても学業と同様の回答を求めた。③locus of control（LOC）尺度：鎌原・樋口・清水（1982）の尺度を使用した。4件法で全18項目、点数が高いほどInternal、低いほどExternalである。④self-esteem（SE）尺度：Rosenberg（1965）の尺度の星野（1970）による日本語訳を使用した（4件法、全10項目）。⑤努力観の記述：「私にとって、『頑張る』ことは、…」という文章完成法（SCT: sentence completion test）を求めた。

(3) 結果と考察

尺度項目分析　LOC尺度合計得点の上位25％を上位群（48名）・下位25％を下位群（53名）としてG-P分析を行ったところ、全ての項目に有意差が見られ（p<.001）、信頼性も α =.79と高かった。SE尺度も同様に上位群（54名）・下位群（51名）で検定したところ、全ての差が有意であり（p<.001）、α 係数も.85と十分な値を示した。

重要度評定の影響　学業領域の重要度評定から、重要群（155名、70.5％）と非重要群（64名、29.1％）に分類した。χ^2検定の結果、度数の偏りは有意であり（χ^2（1）=37.81, p<.001）、学業を重要と考える者が多かった。重要度とLOCが帰属様式に与える影響を検討するため、3つの帰属得点それぞれを従属変数、重要度得点(1-4点)と、LOC得点を独立変数とする重回帰分析を行ったところ、能力帰属において重要度からの有意なパスが見られた（重要度 β=-.14, p<.05；LOC β=-.12, n.s.；R=.20, p<.01）。内的努力帰属でも重要度からのパスが有意であった（重要度 β=-.23, p<.001；LOC β=-.02, n.s.；R=.23, p<.01）。外的努力帰属では、重相関係数が有意傾向しか示さなかったものの、LOCからのパスが有意であった（重要度 β=.08, n.s.；LOC β=-.15, p<.05；R=.16, p<.10）。なお、独立変数間に相関はなかった（r=.15, p<.05）。標準偏回帰係数そのものの値は小さめだが、重要な分野で無能であれば自己への大きな負のダメージとなるので能力帰属を避け、重要ではない分野で能力帰属を行うという自己防衛的帰属様式の存在が証明された。内的努力帰属も重要であるほど避けられる傾向にあり、このことは、失敗時の内的努力への帰属は能力と同じく不適応的である可能性を示していると考えうる。また、こちらも低い値ではあるが、LOCからのパスによって、Externalであるほど外的努力に帰属する、という傾向も示された。そもそもExternalであるということは、統制感を持っておらず、外的なものに帰属しやすいということであり、同じ尺度を用いた研究でもそのことは示されているため（鎌原・樋口・清水, 1982）、当然の結果と言えよう。「何かのせいで努力できなかったから」を外的努力帰属とみなす妥当性が確認されたと言える。

スポーツ領域でも同じ手続きで分類したところ、重要群が117名（53.2％）、非重要群が99名（45.0％）となった。度数の偏りはなく（χ^2（1）=1.50, n.s.）、学業領域は重要とみなされがちだが、スポーツ領域にはそのような傾向はないことがわかった。また、同じ手法で重回帰分析を行った結果、学業領域と同様、能力帰属に重要度からの有意なパスが見られた（重要度 β=-.23, p<.001；LOC β=-.11, n.s.；R=.25, p<.001）。内的努力帰属（重要度 β=-.12, n.s.；LOC β=-.01, n.s.；R=.12, n.s.）・外的努力帰属（重要度 β=.12, n.s.；LOC β=-.02, n.s.；R=.12, n.s.）は、いずれも重相関係数が有意でなかった。なお、重要度得点とLOC得点に相関はなかった（r=-.08, n.s.）。よって、スポーツ領域においても、学業領域と同様、重要であれば能力に帰属しないという自己防衛的帰属が見られた。しかし、学業領域で見られた重要度から内的努力へのパス、LOCから外的努力帰属へのパスは見られず、領域による違いが見られた。

領域の影響　領域ごとに帰属得点を分散分析（被験者内配置）にかけたところF値は有意であったので、LSD法による多重比較を行った（Table1）。学業領域においては内的努力帰属、能力帰属、外的努力帰属の順に有意に高かったが、スポーツ領域においては外的帰属が他2領域よりも低かっただけで、能力帰属と内的努力帰属の間に差は見られなかった。

Table1：領域ごとの帰属得点比較

	能力帰属	内的努力帰属	外的努力帰属	F 値	多重比較(LSD)
学業領域	44.91(28.08)	66.04(29.98)	24.68(27.89)	98.06***(d.f.=2,424)	外的<能力<内的
スポーツ領域	57.71(28.46)	44.58(30.82)	26.63(31.57)	49.49***(d.f.=2,414)	外的<内的，能力

***p<.001　カッコ内は標準偏差

学業領域の失敗は能力帰属よりも内的努力帰属され、スポーツ領域では両帰属に差がないことがわかったが、重回帰分析によって両領域とも重要とみなさなければ能力に帰属しない傾向が明らかにされている。学業領域はスポーツ領域と異なり重要とみなす人数がもともと多いことがχ^2検定によって示されているので、帰属の差が領域の違いに基づくとは断定できない。そこで、重要群と非重要群ごとに先程と同じく分散分析（被験者内配置）・多重比較（LSD法）を行ったところ、効果は全ての条件において有意であったが、多重比較では学業領域・重要群とスポーツ領域・非重要群においてしか有意差が見られず、それも外的努力帰属との間のみで、能力帰属と内的努力帰属の差は見られなかった（Table2）。しかし、有意差はでなかったものの、得点そのものに注目すると学業領域ではいずれも内的努力帰属、スポーツ領域では能力帰属が高かった。

Table2：領域と重要度ごとの帰属得点比較

	能力帰属	内的努力帰属	外的努力帰属	F 値	多重比較(LSD)
学業・重要(n=155)	42.29(26.99)	62.72 (30.56)	26.64 (28.80)	54.22***(d.f.=2,296)	外的<内的
学業・非重要(n=64)	52.19(30.47)	71.72 (29.73)	21.59 (26.16)	49.50***(d.f.=2,124)	——
スポーツ・重要(n=117)	52.07(28.97)	42.28 (30.66)	30.90 (32.26)	11.84***(d.f.=2,220)	——
スポーツ・非重要(n=99)	63.88(27.23)	47.11 (31.09)	22.19 (30.96)	45.52***(d.f.=2,190)	外的<能力

***p<.001 カッコ内は標準偏差

努力観の影響 SCTの内容から、努力をポジティブなものとしてのみ捉えている群（P群）と、ネガティブなものとしてのみ捉えている群（N群）、どちらともいえない、あるいはどちらの意味でも捉えている群（PN群）に被調査者を分類した。ポジティブというのは、「努力すれば結果が出る（努力信仰）」「結果は出ずとも努力すること自体素晴しい（努力賛美）」「努力することが好き（努力親和）」等の考えを表わしているもの、また、ネガティブとは、反対に「努力してもどうせ無駄」「努力は貴重な犠牲を伴う」「努力するのは嫌い」等の考えを表わしているものを指す。この際、意味不明の記述をしていた5名（2.3%）は分析から除外した。分類は教育心理学専攻の大学院生3名で行い、議論後は95.0%の一致率を得た。それぞれの群の記述例をTable3に示す。

Table3：P 群・N 群・O 群の記述例

P 群	N 群	PN 群
女（大学3年、20歳）	女（大学2年、20歳）	男（大学3年、21歳）
1. 自分の持てる力を出し切って物事に一生懸命対処すること	1. あほのすることである	1. 物事を前へ進めるには必要なこと
2. 大変価値のあること	2. 「無理」と同意語である	2. いやなこと
3. 自分の能力を最大限に引き出すために必要不可欠なこと	3. 自信満々で前向きに生きてたら頑張らなくてもなるようになるもん	3. 評価されるべきこと

3群間でLOC尺度及びSEの合計得点を一元配置分散分析・多重比較（DunnettのT3）で比較したところ、LOC尺度得点で有意差が見られ（Table4）、ポジティブな努力観を持っている者ほど自らの力で結果を出せるという自信があることがわかった。SE得点に差はないことから、この群分けは全般的にポジティブな者とネガティブな者の分類ではなく、努力観という限定的信念の分類であることが証明された。

Table4：性格特性得点の SCT 群間比較

	P 群(n=109)	N 群(n=23)	PN 群(n=83)	F 値(d.f.=2,212)	多重比較(Dunnett の T3)
LOC 得点	50.31(6.94)	45.13(11.48)	47.64(6.61)	6.07**	PN 群<P 群
SE 得点	28.44(5.23)	26.48 (6.91)	27.57(4.75)	1.59	

**p<.01 カッコ内は標準偏差

学業領域に関し、群間で帰属に差が見られるかどうか検討するため、能力帰属得点、内的努力帰属得点、外的努力帰属得点について一元配置分散分析・多重比較（DunnettのT3）を行った（Table5）。結果、外的努力帰属についてのみ有意差が見られ、N群が他2群よりも高かった。なお、群間で重要度の評定には差がない（F（2,211）=1.08, n.s.）ため、重要度の影響による差ではない。ネガティブな努力観を持っている者ほど外的な努力に対しての帰属を多く行っており、個人の自由な記述によって努力観を考慮すれば、従来の帰属研究では見落とされていた帰属様式や努力帰属の意味が見えてくることが支持された。

Table5：学業領域における帰属得点の SCT 群間比較

	P 群(n=109)	N 群(n=23)	O 群(n=83)	F 値(d.f.=2,211)	多重比較(Dunnett の T3)
能力帰属	42.02(27.11)	50.00(32.51)	46.71(28.46)	1.09	——
内的努力帰属	64.68(31.99)	72.61(24.72)	63.66(30.61)	.78	——
外的努力帰属	23.43(27.99)	42.86(33.04)	22.41(25.23)	4.95**	PN 群, P 群<N 群

**p<.01　カッコ内は標準偏差

スポーツ領域においても学業領域と同じ統計処理を行ったが、重要度評定（F（2,208）=.43, n.s.）、能力帰属得点（F=1.57, n.s.）、内的努力帰属得点（F=.56, n.s.）、外的努力帰属得点（F=.37, n.s.）いずれにおいても群間に有意差は見られなかった。努力観の考慮が外的努力帰属においても意味をなさなかったのは、領域を指定して目標を得た方法論上の問題が考えられる。大学に進学してきた被調査者たちにとって、学業は生活の中心をなしたこともあり、ある程度は重要なものであっただろうし、学業領域における能力帰属・努力帰属もなじみ深いものであっただろうが、スポーツは学業と比べるとそれほど自己との関連が深くない人が多かっただろう。実際、学業は重要と評定する者が多かったが、スポーツでは偏りは見られなかった。つまり、領域を指定するのではなく、完全な自由記述で目標を得れば、同質の学業・スポーツ領域の目標が得られるのではないかと推察される。

3．研究 2

(1) 目的

より自我関与の高い領域を得るため、完全な自由記述で目標を得、研究1で示唆されたように、学業領域は努力不足、スポーツ領域は能力不足という帰属様式が再び見られるか検討する。失敗条件だけではなく成功条件も扱い、条件間で帰属様式を比較する。また、努力観が領域や時期によって異なる可能性を考え、目標ごとに努力観を求め、それによる帰属の違いを検討する。

(2) 方法 [2)]

被調査者と手続き　大阪府下及び鹿児島県下の大学に所属する大学生475名（男性127名、女性347名、不明1名; 平均年齢19.17歳）。1999年10月から11月にかけ、心理学の授業中に質問紙を配布、回収した。

調査内容　より多くの目標を得るため、以下の質問が3回繰り返され、被調査者は目標を最大3つまで表出できる。①目標の自由記述と重要性・努力の必要性の評定：「あなたは、過去に何か目指していたこと、目標を持って頑張っていたことがありますか」と目標の記述を求め、達成の重要性を評定させた（4件法）。達成のための努力の必要性についても、同じく4件法で回答を求めた。②成功・失敗と帰属の評定：目標を「達成できた」「ある程度達成できた」「あまり達成できなかった」「達成できなかった」のいずれかに回答を求めた。「達成できた」「ある程度達成できた」と回答した者へは「もともと才能があったから（能力）」・「頑張ったから（努力）」、「あまり達成できなかった」「達成できなかった」と回答した者へは「もともと才能がなかったから（能力）」・「頑張らなかったから（努力）」という帰属因を用意し、100点満点で数直線上に○をつけるという方法で帰属させた。③努力観の自由記述「その時のあなたにとって、

『頑張る』ことはどんなことでしたか。イメージや好き嫌いなど、何でも思いつくものを詳しく書いて下さい」と教示し、努力観の自由記述を求めた。

(3) 結果と考察

目標の種類 合計860個（1人平均1.81個）の目標が得られた。最も多かったのは受験や定期テストなど学業領域の目標で、311名(65.6%)が表出しており、次に多かったのは、野球やサッカーなどのスポーツ領域の目標であった(140名、31.4%)。以下の分析はこれら2領域に絞って行なった。当質問紙では1人が複数の目標をあげられるが、統計処理の都合上、以降は1人1つの学業もしくはスポーツ領域の目標をとりあげることにし、2つ以上の同領域の目標をあげていた場合には最初にあげたものを優先させたところ、分析に使用した被調査者は学業領域で311名（男性84名、女性227名; 平均年齢19.13歳）、スポーツ領域で148名（男性54名、女性93名、不明1名; 平均年齢19.29歳）となった。

学業領域での達成を重要と回答したのは96.2%にあたる299名、スポーツ領域では97.3%にあたる144名であった。研究1ではスポーツ領域における重要性にばらつきが見られたが、完全な自由記述で目標を得れば、真に達成を志向していた非常に重要性の高い目標が得られることが証明された。なお、「努力の必要性」を4件法中最も高く評定した者は、学業領域で70.4%（219名）、スポーツ領域で79.1%（117名）であり、双方とも努力しなければ達成できない目標であると認知されていた。

帰属様式の検討 達成と帰属得点との関係を検討した。学業領域の目標を「達成できた」「ある程度達成できた」とした者を成功条件（n=218）、「あまり達成できなかった」「達成できなかった」とした者を失敗条件（n=93）とし、第1要因を被験者間配置（成功・失敗）、第2要因を被験者内配置（能力帰属・努力帰属）とする2×2の分散分析を行ったところ、交互作用はなく（$F(1,309)=.84$, n.s.）、達成と帰属それぞれの主効果が見られた（達成 $F(1,309)=29.02$, $p<.001$; 帰属 $F(1,309)=186.35$, $p<.001$）。成功時のほうが失敗時よりも能力・努力への帰属が高く、また成功時失敗時いずれも能力より努力に多く帰属されていた(Figure1)。努力帰属が最も多い点は、従来と同様の結果であった。しかし、努力の必要性が極端に高かったことを考慮すると、成功も失敗も努力如何で左右されるという、帰属と関連する性質がそもそも目標自体に内包されていたと考えるのが自然である。従って、成功した場合には並大抵でない努力が実際行われていたであろうし、失敗した場合には努力不足が疑われて当然の状態であっただろうから、努力への帰属が能力帰属よりも高いことはむしろ必然でもある。また、前述したように日本では努力不足への帰属は能力不足ほどではなくても適応的な働きをしにくい。よって、成功時の能力・努力への帰属が失敗時のそれより高い、という結果は、成功を享受し失敗からのダメージを少なくする、自己高揚的もしくは自己防衛的帰属様式と考えうる[3)]。能力帰属に関して言うと、このような結果は先述した従来の結果と異なる。今回のように自由記述で得た自我関与が高く重要な目標の場合、成功は大きな高揚感や自信などを与えるが、失敗時のショックも計り知れない。それを軽減するため能力や努力への帰属が避けられたと考えられ、従来の研究結果との違いを生んだものは、そのような目標の質にあると考えられる。また、努力帰属については、成功条件の方が多いという結果が多く（Haraoka, 1991; Yamauchi, 1989）、古城（1980）は匿名条件で同様の結果を得ている。したがって、成功時の方が努力帰属が高いという結果は従来の知見と矛盾するものではない。

スポーツ領域でも同様に、成功（n=89）・失敗（n=59）と帰属の関係を検討した。分散分析の結果、交互作用が有意であった（$F(1,146)=47.24$, $p<.001$）。成功時は能力より努力に帰属され、失敗時はその差はほとんど見られなかった（Figure2）。従来の研究及び研究1では、スポーツ領域の失敗は能力に多く帰属されていたが、今回の結果は異なり、むしろ点数では努力帰属がまさっていた。真に達成を願い努力を重ねていた領域であり、かつ重要性が非常に高く失敗時に受ける影響が大きいことが作用しているのだろうと考えられる。

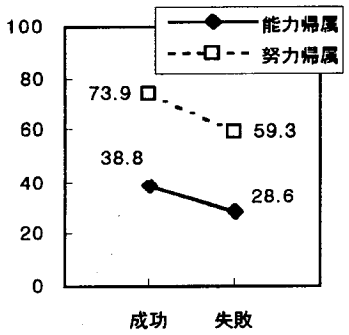

Figure1：学業領域における能力・努力帰属

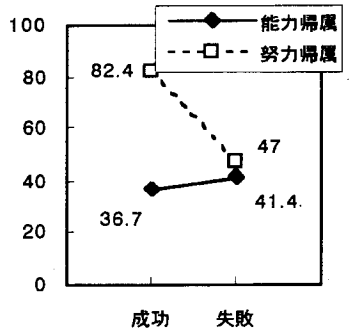

Figure2：スポーツ領域における能力・努力帰属

努力観の検討　努力観を、ポジティブな記述しかしていない群（P群）と、ネガティブなものとしてのみ記述した群（N群）、いずれの記述もある群（PN群）、どちらにも分類しがたい群（努力観というよりは客観的・具体的な努力法を記述した者も含む）（O群）に分類した。研究1と異なり、今回O群を設定したのは、ポジティブ記述の有無（P群, PN群 vs. N群, O群）とネガティブ記述の有無（N群, PN群 vs. P群, O群）のどちらの分類がより影響力があるのかを検討するためである。記述の分類は、教育心理学専攻の大学院生3名で行い、議論後の一致率は87.0%であった。それぞれの群の記述例をTable6に示す。

Table6：P 群・ N 群・ PN 群・ O 群の記述例

P群	N群	PN群
女（大学1年、18歳）	女（大学1年、19歳）	女（大学1年、18歳）
すばらしいこと。空いている時間を見つけては勉強していたので、時間を無駄にしていないという意味でもかっこいいというイメージもあった。	寝る暇を惜しんだり、自分のやりたいことを我慢して黙々と生きねばならない、とても辛いものだった。投げ出したい、現実逃避したいと思うことも多々あり、毎日気が重く、憂鬱だった。	頑張ることが楽しかった。けれど、結果が出なくて嫌になって、でも頑張って、楽しくなって、の繰り返し。

O群	
女（大学1年、18歳）	女（大学1年、19歳）
頑張るとはそれだけを見続けること。努力をすること。ただしその努力とは、いかなる行為を“頑張った”としても、結果が生まれなければ“頑張っていない”、すなわちそれは努力ではないと考えていた。	とにかく偏差値を上げるために勉強すること。そして、先生に第一志望の大学を受けさせてもらえるように勉強すること。

学業領域において、努力観群間で帰属様式に差が見られるか、成功・失敗ごとに能力・努力帰属得点について一元配置分散分析・多重比較（DunnettのT3）を行った（Table7）。結果、成功条件の能力帰属のみに有意な差が見られ、P群がN群よりも高かった。成功の能力帰属は、有能感を高め、連続した成功を約束する最も適応的なものであるが、ネガティブな努力観のみを持っている者は、ポジティブな努力観のみを持っている者に比べて能力に帰属しにくいという傾向が明らかになった。

Table7：学業領域における帰属得点の努力観群間比較

成功条件	P群(n=31)	PN群(n=29)	O群(n=103)	N群(n=51)	F値(d.f.=3,210)	多重比較(Dunnett のT3)
能力帰属	51.29(26.17)	35.34(26.92)	39.27(26.27)	34.12(24.75)	3.10*	N群<P群
努力帰属	72.58(25.03)	78.62(19.03)	73.98(23.36)	70.39(26.23)	7.66	——
失敗条件	**P群(n=14)**	**PN群(n=8)**	**O群(n=39)**	**N群(n=30)**	**F値(d.f.=3,87)**	**多重比較(Dunnett のT3)**
能力帰属	24.29(22.77)	25.00(23.30)	28.72(29.75)	31.33(28.62)	.25	——
努力帰属	51.43(39.59)	51.25(34.41)	55.38(36.12)	68.33(26.27)	1.30	——

*p<.05　カッコ内は標準偏差

スポーツ領域でも同じ分析を行った（Table8）。学業領域と同じく、成功の能力帰属のみに有意差が見られ、N群が他3群よりも低かった。

Table8：スポーツ領域における帰属得点の努力観群間比較

成功条件	P群(n=21)	PN群(n=17)	O群(n=44)	N群(n=6)	F値(d.f.=3,84)	多重比較(Dunnett のT3)
能力帰属	36.36(21.28)	45.88(20.93)	35.35(23.84)	15.00(10.49)	2.96*	N群<O群,P群,PN群
努力帰属	84.55(15.95)	85.29(13.28)	80.70(15.49)	86.67(17.51)	.64	——
失敗条件	**P群(n=13)**	**PN群(n=7)**	**O群(n=29)**	**N群(n=9)**	**F値(d.f.=3,54)**	**多重比較(Dunnett のT3)**
能力帰属	37.69(34.19)	52.14(20.79)	39.66(31.11)	40.00(30.82)	.38	——
努力帰属	41.54(34.84)	50.00(30.00)	45.52(31.91)	56.67(25.00)	.46	——

*p<.05　カッコ内は標準偏差

4．総合的考察

自由記述で達成領域を得るという方法を用い、帰属様式を検討した。研究1では達成の重要度の影響が見られ、重要であれば能力不足に帰属しないという自己防衛的帰属が行われていることが示された。学業領域の失敗は努力に、スポーツ領域の失敗は能力に帰属されるという従来と同様の帰属様式がとられている可能性も示唆されたが、より自我関与の高い領域が得られるよう工夫した研究2では後者の結果は見られなかった。従来の知見と考えあわせると、学業は成功も失敗も努力に最も多く帰されるが、真に達成を志向し重要性が高くなるほど、成功を能力や努力に帰属し、失敗を能力や努力に帰属しないという自己高揚的・自己防衛的帰属様式がとられることが示唆された。スポーツ領域の目標は、成功は努力に、失敗は能力に帰属されるが、真に達成を志向し重要性が高くなるほど、失敗は努力不足に帰属され、能力不足には帰属されにくくなるという傾向があると考えられよう。

また、研究1の努力観の検討からは、外的努力帰属は両領域共に最も帰属得点が低いものの、学業領域においてはネガティブな努力観の者が比較的多く帰属しており、外的努力という概念が他の帰属因と比べて一般的ではなくネガティブな努力観を持った者にのみ共有されるという可能性が考えられる。研究2では、学業・スポーツ領域とも、成功の能力帰属で努力観の影響が見られ、ネガティブな努力観のみを持った者は適応的帰属様式をとりにくいことが示されたが、注目すべきことは、努力観による差は失敗の外的努力帰属と成功の能力帰属のみに見られ、一般的に用いられる努力帰属（研究1で言う内的努力帰属）に点差などはなかったことである。これは、同じ「努力」帰属でも全く意味が異なるにも関わらず、通常の帰属の捉え方ではそれらを弁別することができないことを明らかにしている。理論で想定されている努力帰属の機能が実証されにくい一因ではないかと考えられる。なお、研究1では努力観をP群・N群・その他をまとめたPN群の3つに分けたが、研究2ではPN群を、両義的な努力観を持つ群（PN群）とポジティブともネガティブとも言えない群（O群）にさらに分割した。結果として両群間には有意差が見られず、PN群

とO群の違いが何であるのかはっきりわからなかった。また、帰属得点からも、PN群・O群が必ずしもP群とN群の中間に位置するわけでもなさそうである。努力をポジティブな意味でも捉えているか（つまりP群・PN群）と、ネガティブな意味でも捉えているか（N群・PN群）のどちらが帰属様式を考える上で有効な要因かについても統一的見解を得ることができなかった。今後の課題である。

＜注＞

1) これまでにも努力の意味を問い直した研究はあるものの、能力査定や能力観との関係内での検討に留まっている（Covington & Omelich, 1979; Hayamizu, Ito & Yoshizaki, 1989）。

2) この調査は、京都ノートルダム女子大学人間文化学部の尾崎仁美講師との共同研究として行われたものである。

3) 本稿の主張のように個人によって努力帰属の意味が様々であり、成功の努力帰属が誰にとっても自己高揚的・自己防衛的帰属であるとは限らないが、ここでは帰属様式そのものに関し従来の研究と比較するため、このような表現を用いた。

＜引用文献＞

Abramson, L.Y. 1988 Social cognition and clinical psychology: A synthesis. New York: Guilford Press.

相川　充・三島勝正・松本卓三　1985　「原因帰属が学業試験の成績に及ぼす影響―Weinerの達成動機づけに関する原因帰属モデルの検討―」　『教育心理学研究』, 33, 195-204

天沼　香　1987　『頑張りの構造』　吉川弘文館

Antaki, C., & Brewin, C. (Eds.) 1982 Attributions and psychological change: Applications of attributional theories to clinical and educational practice. London: Academic Press Inc. Ltd. 細田和雅・古市裕一監訳　1993　『原因帰属と行動変容－心理臨床と教育実践への応用－』　ナカニシヤ出版

Bandura, A. 1977 "Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change." Psychological Review, 84, 191-215

Covington, M.V., & Omelich, C.L. 1979 "Effort: The double-edged sword in school achievement." Journal of Educational Psychology, 71, 169-182。

土居健郎　1971　『甘えの構造』（第3版）　弘文館

Haraoka, K. 1991 "Perceived teacher's expectations, causal attribution of test results and pupils' motivation." The Japanese Journal of Experimental Social Psychology, 30, 229-241

Hayamizu, T., Ito, A., & Yoshizaki, K. 1989 "Cognitive motivational processes mediated by achievement goal tendencies." Japanese Psychological Research, 31, 179-189

平川(上野)淳子・尾崎仁美　2000　「達成動機研究における方法論の検討と課題」　『大阪大学教育学年報』, 5, 85-98

星野　命　1970　「感情の心理と教育」　『児童心理』, 24, 1445-1477

伊藤豊彦　1980　「運動パフォーマンスにおける成功・失敗の原因帰属に関する研究」　『体育学研究』, 25, 105-111

伊藤豊彦・豊田一成・杉原　隆　1985　「スポーツにおける原因帰属様式の年齢的変化について」　『島根大学教育学部紀要（教育科学）』, 19, 57-62

鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治　1982　「Locus of Control尺度の作成と、信頼性・妥当性の検討」　『教育心理学研究』, 30, 302-307

苅谷剛彦　1995　『大衆教育社会のゆくえ―学歴主義と平等神話の戦後史―』　中央公論社

北山　忍・高木浩人・松本寿弥　1995　「成功と失敗の帰因―日本的自己の文化心理学―」　『心理学評論』, 38, 247-280

古城和敬　1980　「成功・失敗の原因帰属に及ぼすpublic esteemの効果」　『実験社会心理学研究』, 20, 23-34

中谷　彪　1991　「"ガンバレ" 論の教育学的考察―アメリカと日本の教育文化比較―」　『教育学論集』, 20, 111-119

奈須正裕　1988　「Weinerの達成動機づけに関する帰属理論についての研究」　『教育心理学研究』, 37, 84-95

尾崎仁美・上野淳子　2001　「過去の成功・失敗経験が現在や未来に及ぼす影響―成功・失敗経験の多様な意味―」

『大坂大学人間科学部紀要』, 27, 65-87
桜井茂男 1989 「児童の絶望感と原因帰属との関係」 『心理学研究』, 60, 304-311
上野淳子 2001 「努力とは何か？—努力動機という観点から—」 『大阪大学教育学年報』, 6, 161-172
Rosenberg, M. 1965 Society and the adlescent self-image. New Jersey: Princeton University Press.
Weiner, B. 1979 "A theory of motivation for some classroom experiences." Journal of Educational Psychology, 71, 3-25
Weiner, B. 1983 "Some methodological pitfalls in attributional research." Journal of Educational Psychology, 75, 530-543
Weiner, B., Frieze, I., Kukla, A., Reed, L., Rest, S., & Rosenbaum, R.M. 1971 "Perceiving the causes of success and failure." In E.E. Jones, D.E. Kanouse, H.H. Kelley, R.E. Nisbett, S. Valins, & B. Weiner(Eds.), Attribution: Perceiving the causes of behavior. New Jersey: General Learning Press., 95-120
Yamauchi, H. 1989 "Congruence of causal attributions for school performance given by children and mothers." Psychological Reports, 64, 359-363

Attributional Styles in Academic Work and Sports: Considering the Importance of Achievement and Conception of Effort

UENO Junko

The purpose of this paper is to examine attributional styles in academic work and sports by considering the importance of achievement and individual conception of effort. The subjects of this study were college students and the data was collected using open-ended questionnaire. In Study 1, participants' attributional styles to ability, internal-effort, or external-effort in unsuccessful situations were investigated. In Study 2, participants' attributional styles to ability or effort in successful and unsuccessful situations of experiences that the participants' considers important were examined. The main results were as follows: (1) importance of achievement was negatively related to ability attribution in unsuccessful situations; (2) academic success and failure, and sports success were more attributed to effort than to ability; (3) sports success tends to be attributed to ability, but the importance of achievement increased attribution to effort; (4) analysis of the influence of individual conceptions of effort revealed that negative conceptions, such as "efforts do not link to desired result", "efforts require great sacrifice", and "I hate making efforts", were positively related with external-effort attribution for failure, and negatively related with ability attribution for success. It is suggested from this study that effects of effort attributions vary with the individual conceptions of effort.